水上勉全集 14

水上勉全集

14

水上勉全集　第十四巻

昭和五十二年七月一日印刷
昭和五十二年七月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二一三四
検印廃止
©一九七七

目次

焚火 3
有明物語 377
猿籠の牡丹 413
椋鳥よ 443
あとがき 459

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

焚

火

一　章

背山の高みで雉が鳴いている。

縁先の戸をあけに立った。橙いろの短い陽ざしが、小枝をつき出したように、足もとへ落ちてきた。

足袋のこはぜがふたつはずれている。しゃがんで、かけようとしたが、うけ糸があまくて、何どかけてもすぐはずれた。はずしたまま庭をながめた。

雉がまた鳴いた。

築山の隅にある檀は、果が少なくて、いつもなら、房になってさがるのに、葉だけが混んで、これも橙いろに染まっている。そういえば、池の岸に根をもりあげている橡にも、果は少なかった。例年より心もちこぶりなのも気にかかる。樹々に果のうすい秋がくるのだろうか。

「ごめんなして……」

と戸口の方で女の声がした。

久四郎は返事をしないで、ゆっくり居間を横切り、廊下へ出ると、そこから四尺になっている床を、こはぜのすれる音をさせて玄関へまわった。

戸をあけたままで土間にたたずんでいた女は、陽を背にしているので、すぐ顔がよめなかった。
「どなたかいの」
「はえ、音松の家内です。旦那さんが東京へゆきなさるときいたもんで……頼みたいことがあってのし」
川岸つづきで、漆器の木地づくりしている音松の細君だった。仕事のあいまをみて、走ってきたらしく、よごれた前かけをはずしながら、久四郎を仰ぐようにみたが、しょぼくれた眼に、心なしこの女の持ち前である貧相な翳があった。
「誰にきいた、わしが東京へゆくのを」
訊きかえして、何かいいあぐねている細君をみた。
「はえ」
とまたひとつお辞儀して、
「これを娘になァ……駅へ来させますで、わたしてほしいと思いましてのし。あつかましいこってすがのう」
封筒に入れた信書のようなものをさしだす。町の高校を出たかよが、去年の春に家政大学へ入学して、寄宿舎にいる。その娘へわたしてくれというのだった。
「ああ……」
久四郎はうけとった。
「東京駅へきてくれるかのう。わしの顔がわかるかのう」

「わかりまっす。旦那さんの顔は、区長さんしなはった人やで、あれはようおぼえとります……。何時の汽車ですかいのう」

四十を出てまのないはずなのに、ひどく老けが目立つ女である。封書なら郵便で出せばよさそうなものを、面倒なことを言いにきたものだ。

汽車は、何時発にするか決めていなかった。気が変れば、あすにのばすやもしれない、気ままな旅だ。音松の娘が東京駅で待っているとしたら、はっきりした時間を教えてやらねばならぬ。かすかな困惑をおぼえて、

「じつはまだ汽車をきめていないんやがね……駅へ出てもらういうても、東京はここらとちごうて人も多いやろし見失うわね。何かいね。かよさんはいまどこにいなさる……わしがそこへもってってあげてもよいが」

「旦那さんに……、そんな」

と母親はすまなそうな顔になったが、封書の中味は是が非でも手わたしてもらわねばならないものらしくて、

「あれに……駅へこさせますで」

といった。

「かまわん、かまわん。わしも長男の家へ行って、これをせんならんという用事があるわけでもない……住所さえわかれば、行ってあげる」

というと、ぺこりとまたお辞儀して、

「世田谷の松原ちゅうとこですけどなァ」
といった。世田谷なら、長男の勇一の家とそう遠くなかった。同じ小田急線の方向だ。
「番地をこれにかいて下さい」
いったんうけとっていた封書をもどしたが、細君は受けとらず、この時、帯の下から折りたたんだ紙切れを、ささくれた指先につまんでだした。
「旦那さん、松原の二丁目、七七八番地です。ここに学校から世話してもろた家があって……間借りしとります」
久四郎はしかたなくうけとった。
東京都世田谷区松原二丁目七七八番地。順徳家政会館。細君の手ではなくて音松の字らしかった。勇一の家は、狛江だった。こんどで三度目の東京ゆきだが、その都度、電車にのって、新宿との間を往復しているので、世田谷の見当はだいたいつく。ことづかった封書を、娘に手わたしてやるぐらいのことは億劫でもなかった。だが、母親がいま音松に内緒の手紙を頼みにきたらしいのが気になった。内緒でなければ、その家政会館の朋輩に知れては困るものか。速達で出せば明日の夕刻には着きかねないうすっぺらな封書だ。こだわったのはそのことだが、しかし、久四郎は笑って、
「散歩がてら行ってあげるわな。娘さんがどげな家で勉強しよるかみたいでのう」
といった。
「どげなところで……旦那さん、寮とはいうけんど……小さな下宿屋やそうですわな。うちはま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

んだいっぺんもいっとらんのです」

「あんたも見とらんのなら、尚更だ、わしがいってきてやる」

まだこの時も背山の高みで雉が鳴いていた。

東京へゆく気になったのは、五日ほど前のことで、音松の細君にいったとおりである。長らくつとめていた町役場の収入役から解放されたのはこの五月。習慣は、恐ろしいもので、辞めれば、それだけ朝寝も出来、休養もとれるというわけにはゆかなかった。朝はあいかわらず六時に眼がさめ、付近の散歩に靴を履いて出る自分にあきれた。ぶらぶらしているうちに夏がすぎて、陽ざしも風も、めっきり秋たつ気配が濃くなると、独り暮しのスキ間風がなんということなく、振舞いのはずみに感じられて、どこかへ旅行してきたい気分になった。つまり、動機も不鮮明なのである。その気になれば、ついでのことだから諸方へ散らばっている娘や息子たちの近況を覗いてきたい気もした。それにもう一つは、いまも、音松の細君の眼に出ていたように、収入役をやめる前後に起きた不愉快な事件——である。どこをどうつつかれても、こっちに不正は微塵もない自信はあるにしても、同じ建物にいた町長や助役や商工課長らが、来春から建設にかかる誘致工場の大阪本社から、賄賂をうけていたという醜事の露見から、町長リコールにも発展しかねないほど議会が荒れた。せまい町だから女子供にも知れた。問題の工場との土地斡旋のことで、再々もめた議会の様子などは、部屋が近いものだから、窓越しに見ている。くわしくは知らないが、悶着が起きて、役場に火がつきはじめた頃は、もう辞め時だと思った。かえって、事件は自分にとって幸いしたといえるが、しかし、他人はそうはとってくれない。収入役という立場が立場で

もあるので、騒ぎの最中に辞めたのでは、ありもしないことをあるといわれても仕方がない。黙って時のたつのを待つ覚悟だった。だがそれにしても、やはり、町を歩けば、人の眼がどこやら、刺さるのがわかった。ぶらりと旅に出たい、と思ったのも、そういう町ぜんたいから感じるいやな圧迫感から、逃げたいあせりだったろう。若い内ならともかく、六十すぎての旅行に、胸が躍って寝られぬというようなことはまあめったにない。

気がかわれば、出発はいくら延ばしてもいいわけだった。しかし、不意に訪ねてきた近所の細君が、東京へやっている一人娘に何か手わたしてくれ、という。これは、あとで考えると、気ままな旅の出発をせきたてられる材料になった。億劫なことをと思いながら、こっちから番地をきいて、快くひきうけたのもそのせいだろう。自分で自分の心がわからない。やっていることがずいぶん気ままなこのごろなのである。

持ち物を整理しに、奥の寝間へ入ったが、仏間を通った時、さっきあけた縁先の陽ざしがのびていた。西陽の落ちるのは早い。家は南東に縁をひろげている上に、町でも暮れの早い一角であった。仏壇の前へきて、掃除もしたことのない壇の正面に、これだけはいつも気にしてまっすぐたてかけているむつの写真を見た。ひろい額ぎわをせいいっぱいかきあげて、富士額をきれいにきわだたせるのが好きだった妻は、死ぬ直前まで、髪の手入れを怠らなかった。いま、その髪型も、顔つきも、四十年倦きがくるほど見てきたものである。時には流行というものがあって、とりわけて太平洋戦後は、女の髪型もめまぐるしく変ったと記憶しているが、むつは、頑固に頭のてっぺんへたぼを入れ、こんもり中高にした大正風の髪を結いつづけた。それは、七人の子を生

んで、七人ともいまはどうやら人なみの暮しぶりで独立するに至った子供らの、それぞれの性格にも、多少の差はあれ影響していた。髪型や化粧や衣類のことでは、人のいうことを一切きかない女だった。いま、その髪は、久四郎の年代では、なつかしくもあるが、いかにも勿体ぶった大仰な髪型に思えもした。死ぬ時まで、いや死んでからも写真におさまったむつのその髪に、何やら不意に羨望に近い感慨をおぼえた。

こいつ、とっとと先へ逝きやがって……。

そんな声もかけたい気がしたが、しかし、その時は、ほかのことを考えついて、われながらびっくりしている。

どうせ東京へゆくなら、浦和へも、新潟へも行ってきたい。もし、気がむくなら、新潟からまた金沢へ廻って、帰りは京都、大阪、神戸と、散らばっている子供らに会ってきたい。そんな思いが走った。

十年つとめた役場の椅子から、解放されてみて、何どめかの人生の区切りにきている自分がわかる。じつは、毎日の町あるきも、そのような静かな決意と安息が自分をつつんでいることに気づいていた。

久四郎は仏壇に灯はつけず、妻の写真にも手をあわさなかった。しばらく黙ってにらんでいただけで立ちあがると、奥の部屋へ行って、農協の二十周年記念にもらったブルーのスーツケースをあけ、そこへ、当座の下着類や、身廻り品をつめこむと、机のわきへ行って、これもどこかの記念にもらった書類籠から、息子らの最近の手紙をとりだして、縁側にすわった。

あれはむつの三周忌だったろう。気性のあわない子らが、中には孫もつれたのがいて、菩提寺の石段の上に整列した。写真気違いの東京の嫁が記念に撮った。それが一枚出てきた。春先だったので、西安寺の庫裡の屋根にはまだ雪がのこっている。うしろの鐘楼わきの百日紅は死んだような枝をつき出している。七人の息子と娘らは、それぞれの個性を顔に浮かせて、笑ったのや、口を閉じたのやで、まちまちだが、あらためて眺めてみると、孫も入れて総勢十四人である。むつはずいぶん大仕事をやったものだ。あの戦争時から、生活も苦しかった終戦前後、それから、激しいうつり変りの混乱期、約十二年のあいだに、鼠みたいに、つぎつぎと子を産み、とにもかくにも育てあげ、死なせた子は一人もいない。長男の勇一は三十四歳。末っ子の享三が二十三歳。七人のうち男三人、女四人である。享三だけのこして、六人はみな家庭をもっているが、あれから二年たつから、もう享三も二十五のはずである。

久四郎は、その子らの写真をしばらく眺めてからスーツケースに入れると、戸締りして、ふらりと外へ出た。写真をみているうちに寺へ行きたくなった。東京へゆくなら、ちょっと挨拶もしてきたかった。

菩提寺は、町の中央を流れている小田川沿いに、百メートルほど北へゆきあたった山の中腹台地にある。そこまで、久四郎は、漆器の町といわれている小田町の目抜きを歩いた。この町は、大昔から漆器屋が多い。江戸初期からつづいた木地造りや、彫金や、うるし掻きをやってる家である。そんな家は、目抜き通りから川の方へ入りこんだ露地奥に多い、申しあわせたように質素な平家で、見栄をはらない古風な構えである。それに反して、昨今の土産物ブームで、柱掛、掛

額、膳、箸箱などの量産で当てた物産会社だの商会だのは、輸出ものびるところから、ローマ字入りの看板を掲げて表へ進出している。気をつけて見ておれば、時代の流れははっきり町の意匠に出ていた。

久四郎は、車の往来もはげしくなった通りの片側を、陽ざしを逃げるように歩いて、寺まで、かなり段数のある御影石の参道を登った。いつ来ても、ひんやりと身を吸いこまれるような気がするのは、境内に常緑樹が多いせいだった。石段を登りつめ、一と息つくと、あとをふりかえる。川は、寺の下をえぐるように流れ、越前平野の日野川へそそぐ。この流れをはさんで、町は帯のように細長くある。いま、大小まちまちの混んだ町屋根に、橙いろの秋陽がふりそそいでいる。役場もみえる。学校もみえる。火の見櫓もみえる。漆器の始祖といわれた惟喬(これたか)親王を祠る小田神社も、弓状にまがる山のならびに、大杉にかこまれてある。

久四郎は、この菩提寺と、神社の台地に立って町のけしきを眺めるのが好きだった。どこの町にもあまり見かけないけしきであった。というのは、ふつうならどこかに死角が生じ、見えない町の一部分があってもいいはずだけれども、ここからは一望に見わたせた。山が一方にせりあがって、扇面をひろげたような広みに町はかたまっているせいである。

久四郎の父は、明治七年にこの町にうまれた。名を豊吉といった。なんでも久四郎の祖先は、江戸末期にもうこの在に住んでいたらしい。豊吉は、祖父にうるし掻きを習い、死ぬまでうるしを掻いて暮した。

うるし掻きというのは、うるしの樹から、樹液を採集する作業をいう。いつ頃からそうよぶよ

うになったのか知らないが、久四郎は小学校の頃から、〈おめんとこはうるし掻きや〉と友だちにいわれて、かすかな劣等感をもったのをおぼえている。父がいつも、つぎだらけの、紺のはっぴに、紺の股ひき姿で、夏でも毛糸編みの腹巻きだったのが、町屋の人びとの厚司姿に比べて、どことなく貧相にみえたからでもあろう。

貧相にみえたといっても、父は背高くて、〈のっぽの豊〉といわれて、うるしの樹へのぼるのが子供の頃から上手だった。ふつうの人は、うるしの樹をみたら足を遠ざける。カブれるからである。だが、父はカブれなどしなかった。どんな山を歩いても、うるしの樹を見るのは、犬のように敏感で、また、その樹を吟味して、穫れる樹液の質や量を瞬時に測定する才覚があった。一生をうるしの樹のぼりで送った性である。

この父はよく旅をした。能登の輪島と越後の村上が、その行き先であった。なんでも、この二つの町には、父がゆけば無料で泊めてくれる宿があって、そこらの人びとは、父がくるのを待ちこがれていたそうである。いまから思えば、輪島も村上も、うるしをつかう町で、一方は漆器だし、一方は堆朱である。これらの町に、その産業が発達したのは、近くの山にうるしが繁茂していたからだときいた。そうして、それらのうるしから、樹液をとる仕事は、越前男だった。土地の人たちは収穫しないで、専業の越前男がきて、掻いてくれるのを待ったのである。父の旅好きはつまり、そのなりわいからだが、しかし、旅へ出なくなった晩年にも、よく小田の山で働いた。木地の材料である桜や杉を伐る木挽きもやった。

いまでも思い出す姿に、腰につるした大きなヒツのような弁当箱と、縄でまいた細長いうるし

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo